

祭典

小笠原孝次

×

祭典には二つの目的すなはち二つの種類があると言ふことが出来る。幽霊と頭祭といふ言葉がこの二つに當るやうだ。幽霊とは靈(たま)を祭る式であり、頭祭とは神を祭る式である。

みたまとは人間の思念である、思念には所謂生霊と死霊とがある。この人間の思念すなはち思想は、血統を通じて、あるひは思想傳統を通じて軀々として継承伝播されて、五百生も千生も盡きることがない。斯く血統と血統を通じて生死を繰返して行く間に於て、思念は他の思念と複合して、益々人間の精神内容を複雑さ加へて行くことが今日に至る數千年間の経緯である。みたまの内容は遠伝的素質として自己のうちに生存し、その遺伝性は瞑想と反省によつて自己自身のうちに發見することが出来る。また鎮魂によつて他のうちに生きてゐる内容を呼び出して捕捉することも出来る。

その人の過去身のすべて、換言すればその祖先のすべては現在現實にその人の身心の中に生きて活動しつづつある、その人が意識するとしていないと拘らず、祖先のすべては自己として自己のうちに生きてゐる。自己は自己の

祖先であり、祖先はすなはち自己である。原理的に言ふならばそれ等の血統的思想的祖先のすべてを現實の自覚内に蘇還らせることが出来るわけである。それは現在その人の中に生きて生活しつづつある潜在意識を表面に浮上らせて来るだけの事であるから可能のわけである。斯くして浮き上つて来た靈に對して、自己ともに思想的交渉をすることが出来る。これがみたまを祭ることの抑の目的である。

靈を祭ることの要點は故に徹頭徹尾、鎮魂といふことにある。鎮魂とは神道の言葉であるが、佛教で言ふならば禪定である、この禪定の境地を前提として初めて業に對する反省すなはちキリスト教で言ふ懺悔を爲し得られる。この自己の靈的内容に對する反省や懺悔といふことは抽象的の徳目に就ての形式的な自己批判ではなくして、自己の中に生きてゐる、自意識または潜在意識として活動しつづつある實際の意志活動の淵源の實體を捕へることでなければならぬ。斯くて此の方法を鋭く深く追求して行くことによつて、次々とより微妙な、より遠い祖先の靈を呼び戻すことが出来るのである。法華經の前半には斯うして天意味の反省に就て精しく説かれてある。人間は自己の前身、前々生等の因縁によつて現在が規定され、前々生、前身及び現在の因縁によつて後生が規定される。

だが然し此の鎮魂乃至懺悔といふ方法によつて遠い祖先を呼び出して、また幾ら遠い年代の祖先を呼び出して、そこに呼ばれて出て来る靈は依然として人間の靈であつて、神ではない、人のみたまを神と思ひ錯つては

いけない、このみたまを神と思ひ誤り、これを神と呼ぶことが宗教思想の抑の混乱の原因である。自己の裡から突然あるひは忽然と湧き上つて現はれて、一般の常識を越えた、あるひは從來経験したことのない特異な思想や能力をあらはす存在に發覺して、これを神靈不可思議な神の仕事と思ひ込んで敬畏し崇拜したりすることはすべて低俗な宗教者が陥るところの共通の錯誤であるが、人のみたまは幾ら旧いみたまでも依然として人の靈であつて、神とは全然別箇のものであることを心得ておくべきはならない。神の意義に就ては後述するが、この神と人のみたまを混同する

ところが日本の國體をみづから自覚し難くなつて、長い間不可解不可思議な神祕國の狀態で終始しなければならなかつた原因があるのである。靈覺(靈感)と神覺(理性)の區別が出来なくしては理性がいつまでも半透明な靈界の人事に止まつて、明白澄然たる神界(神靈界)の理法に到達することが出来ない。だが然し此の靈覺の修業は斯うして自己の身魂を十代、百代と通つて、換言すれば善惡兩般に亘る自己の可能性すなはち潜在意識、潜在能力を徹底的に究明して、遂に神代に於ける自己の前身に到達する時、ここに始めて人にして神なる「神人」としての自己の内容に行き當る。この自己が淨化された本来の自己である、そして此の清淨な自己の本来の面目を發見することが鎮魂の究極境地である。斯くて鎮魂によつて自己を反省懺悔することによつて神には到達出来ないが、神の道は

神の道は

行はれてる在時代である神代の自己に到達し、その神代の道の内容を学習し実践することが可能である境涯に入るのである。この境地が従来すべての宗教的修業の究極境地であつて、佛教ではこの境地に入ることを發菩提心といひ、その人さ菩薩と言ふ。このためには日本人であるならば自己を振り下げて、年代的には二千年乃至三千年の昔に還へらなければならぬ。

X

神を祭るといふことはみたまを祭るといふこととはまるきり掛け離れたことからである。神(眞)界と靈界とは同じく人間が住む世界ではあるが、その間に恰も海の水と空気の境目のやうな明白な限界がある。元来神といふものは人間が居やうと居まいとに拘らず此の宇宙に存在する玄(道・みち)であり、その道の内容が人間に自覚されて初めて神があらはれる。自覚されぬ以前は混沌である。神は宇宙の法則であり、生命の原理であり、その実体である。

然らば原理法則であるところの神の実体は如何にして人間にあらはれるかと言ふと、換言すれば人間は如何なる方法によつて神を認識するかと言ふと、何れも説く様に數と言葉に於ていある。この言葉と數を以て生命の実体であり原理である神を把握する方法を言の葉の誠の道といふ。即ち言の葉の誠の道は神を祭る上の最も正確にして典型的な方法である。元来祭(まつり)とは眞釣りの義であつて、生命原理の全内容を正しく釣合ひの取れ

た姿に於て守り現はすといふことが祭りと云ふことの第一義である。この祭りの第一義が完全に行ひ得る最勝方便が數と言葉である。この故に數は父(カズ・カヅ)であり、言葉は母(イロハ)である。

日本歴史で言ふならば崇神天皇以前の所謂神代には此の言葉と數である言の葉の誠の道が普く行はれてゐた。故に日本人は悉く、幼くとも藝術と政治経済とを担当しつゝあつた指導階級者は悉く此の宇宙法則すなはち生命の原理を心得てゐた。前号にも掲げたやうに

百敷の大宮人は、鶉鳥、領布取り掛けて、鶴鶴、尾行き合へ、庭雀、群が繞まり居て、今日もかも、酒みぐくらし(應神天皇御製)と言ふのが大宮人の境涯であり任務であつた。斯の如きが所謂神代の時代の間であつて、それは真理の体得者であり、斯の如き人間を特に神人といひ、あるひは山人(仙人・やまひと)と称した。この神人達の代表者、統率者が我が皇祖皇宗であり、その真理の継承実施の責任者が天皇(皇室)である。故に神別皇別の日本人は悉くその首は神人の境涯に培た者であり、今猶日本人の生命の奥底の遺伝子の中にはこの神人達の潜在意識が生きて活らいてゐるのである。

日本人と同じく世界のすべての人類の血統的靈統的祖先もまた悉く神人であつた。神代といふものは世界を挙げて共通のものであり、世界人類の祖先は悉く同一の神人の國体に屬してゐた。此の世界共通の太古の神人の集團を指して日本人は皇祖皇宗と呼んでゐた。

話してゐる。故に我が皇祖は特に日本人がけの皇祖ではない、世界人の靈の祖先である。この靈の祖先を世界はまた夫々の國語を以て或はエホバと言ひ、先王と言ひ、過去神と言ひ若しくはテイタン神族などとも稱してゐるわけである。

だが現代の人類に在つては神と祖先とは別個の存在になつてゐる。即ち現代人から見れば神(理)とは忘却された過去の理想であり、神代とは懸絶された過去の理想世界であり、神人乃至仙人とは我々の祖先には相違ないがその能力や生活状態は既に我々の記憶から消滅してゐるところの或る優秀な尊貴な何者かであつた者だと言ふ程度の認識しか持ち得ないものである。

そこで此の記憶の不明瞭さにあきたらなくなつた或者は、人類の祖先は野蠻人であり、野蠻人は直ちに猿人に連るものとして、進化論的な遠い過去と現代とをいきなり結び付けて、全世界の宗教の記録に残つてゐる、太古の神人の時代、道の時代の存在を抹殺しやうとする。だが觀念的な歴史は抹殺し得やうとも、人類の中に現実に生きてゐる祖先の神人の意識、すなはち道義に対する正しき遺伝性を除去することは不可能である。道義とは生命の自律性に対する自覚である。神代とは人類が此の自覚を現実に顕現して、此の至上至高の自律性によつてのみ社会生活を律してゐた時代のことである。神代とは言は理想的なデモクラシー(民主主義)とリベラリズム(自由主義)の時代であつたわけである。現代は此の生命の自律性の能力が人間の遺伝性とし

マ潜在してゐる時代である。この遺伝の強弱
深淺の度合ひがその人の道義性の度合ひを決定するものと言へやう。この度合ひを日本の
宗派神道では身魂の高低といふ。

斯うして神と神代と神人から懸絶してゐる
現代人の意識として表面上漂つてゐるものは
道の時代であつた神代以後今日に至る精々三
千年間に於ける歴史の過程の中で生殺子奪、
榮枯盛衰の中に喘ぎ、生存して来たところ
の、ちり／＼／＼の生活から醸し出された、
種々様々な思念思想の切れ端であつて、
この断片的な思念思想が、或は憑依靈(動物
靈)といはれ祖靈(人靈)と言はれるもの
の正体である。

神即祖先、祖先(祖靈)即神であることが
宗教の正しい姿である。神は真理であつて、
祖先はその真理の体得者であつた。祖先は神
人であつて、神人は真理の实行者であつた。
真理の实行者が營んでゐた社会が神代であつ
た。此の太古の神代の理想状態に還へるため
には日本へであるならば各々その靈統を辿つ
て歩くとも二千年昔に及ばなければならぬ。
これは道早や振る神代と言はれる道義の時代
が比較的長く、上古に及ぶまで繼續してゐた
日本人であるから二千年で事足りるのであつ
て、道が遠い昔既に隠没してしまつた。天邪
鬼、印度、猶太人に於ては三千年乃至四千年
の昔に幽る必要があらう。其の他のヨーロッパ
人々に於ては他の民族、主として猶太人の靈
統に頼つてそれを辿つて進むのでなければ神
代には到達し難いものかも知れない。すなはち
この意味でヨーロッパ、アメリカに興隆した

ものがユダヤのモーセ教の一派たるキリスト
教であると言へる。またこれがキリスト教が
元のユダヤ教と離れて独立して存する所以で
あるとも言へやう。然し猶、日本人にしてか
らげ或は支那人、或は印度人またはユダヤ人
の靈統を借りなければならぬ者が多く居る。
日本人の大部分は実は大陸や南洋から神代や
上古、中古に渡来した帰化人であるから、こ
れが日本に佛教が禦り儒教が盛んになつた原
因であり、同時に此の二教とキリスト教が日
本になければならぬ靈的遺伝学的理由であ
ると言へやう。

X

斯くして神と祖靈の意義と差別の非凡の了
解が、いたから、これによつて神に到達する
方法に二筋の道が必要であることが判つて来
ぬ。この二筋は実は同時の努力であり、一つ
の努力の両面である。その一つは靈威(感應)
を以て自己の内なる祖先の靈統を辿ること
であり、一つは理性(神感)を以て神代の道の
内容である神理(真理)そのものに直接參與
することである。この二つの努力の方法は車
の両輪の如く、一つが致れば他は成就しな
い。

靈のみ、靈威のみでは神代の道の内容に格
ることは不可能である。鋭利深奥を内觀によ
つて自己を淨化して神の境涯に到り得たと思
つても、それだけでは精密な道の内容に入
り得たことにはならない。得た斯の如き靈
威によつて探り得たと思はれる神代の消息は
現代の想念を基礎として想像されたに過ぎな

い神代であつて、嘗て潜在した神代の内容
のものではない。現代の想念を以て神代の消
息を付度し得たと独断することは靈覚者が犯
したがる共通の過誤である。自己の感應のみ
を以て直接無媒介に神代の真理を覗知するこ
とが人間に可能のものであるならば、釈迦の
説法もキリストの黙示も、モーセの五書も、
その他すべての哲学も神学も、乃至ギリシヤ
神話も支那の説話や易経も、更には後述する
國体神道の学も、及び國体神道に関する咒文
咒物、咒事であるところの天皇の御即位式も
神官の建齋も、その他あらゆる日本人の風俗
習慣となつてゐる年中行事等も全く無用の長
物となつてしまふ。

だが世の中にはこれ等人類の最高の遺産で
あるところの教伝を敢て不用と嘯いて、自ら
直接に高所に到り得たと自負する者が多い。
釈迦は是等の徒輩を稱して辟支佛(獨覺者)
と稱し、真佛と明白な区別を立ててゐる。辟
支佛は佛陀ではないのである。菩薩の位にも
及ばない後級存在である。辟支佛果位で満
足して停頓してしまつてはいけぬ。

だが一方人間は直接真理を嘗ばうとしても
祖先のみたまの遺伝の汚れが残存してゐるは
限られたその遺伝性の限界内の世界だけしか
見えぬから、決して清淨無垢を廣大無辺な
普遍受当な神代の真理は現前しない。鵜が大
や猶や人間を見る時、矢張り鵜のある特別な
一種類である位に思つてゐることだらう。動
物靈の憑依者にはその動物靈の視野だけが
見ることが出来ぬ。泥棒には世の中の間
が泥棒に見えぬだらう。靈覺者には世界

中の女が現實に見えぬだらうし、商人には人間が皆金儲にあくせくする商人に見えぬだらう。同様に人霊に終始する人間には人類の悉くが、娑婆の苦界に呻吟して平和と安息を求めながら永久に迷ひ續けつゝある悲しい、ほろ苦い存在であるとしが思ひ得ないだらう。牛や馬や狐や狸を人間の家の室敷に上げるわけには行かない、厩舎や庭の立木につないで人間だけが家の中へは入る。現実の動物も憑依靈としての動物でも同じことである。動物靈は人間に仕へて仕事をする靈であるが、人間の社会生活の舞台である家庭や会議や祭典や宴会の座に連れて来るわけには行かない。人間は誰でもが動物靈を引連れて活動してゐるものであるが、その動物靈を一旦外に置いて来るのでなければ社会生活の座に加はるわけには行かない、これが「禮」といふ徳目を靈的に觀た消息である。

次に人間は人間自体を普救着のままて神の前に出るわけには行かない、禮服を着けて来る事がそのための定めである、これは肉體の上の形の衣裳であるが、本當の神の前に出るためにはその上に靈の衣裳を着けなければその座に連なるわけには行かないのである。靈魂の衣裳とは神のロゴスである。衣(コロモ)とは心の蒙の意義で、元來心の上に着るものである。

斯くて人間の誰でもが引連れてゐる動物靈を拂拭統御して本来の常識者たる人霊に還へり、次にその人霊を愈々淨化して清淨無垢なキリスト教の靈聖の境涯に還へる過程に於ては幾多の段階がある。佛教では此の過程を、

地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天人・淨土・緣覺等の段階に分けてゐる。また緣覺から菩薩に至るまでの境涯に數段の禪天がある。禪天の最高の境涯が摩訶薩羅天(伊舍那・大自在天)であつて、すなはち識界の頂矣である。ここは伊邪那岐命が島生みを生みを開始する創造の出発点であつて、この禪の所謂「百尺竿頭」に立つて初めて佛者の所謂菩薩素すなはち神界の行に入ることとなるのである、これ等の行の過程、憑依靈、祖靈等の説を他人の事と聞ては意味がない、説者、聞者共に自分自身の問題であることを忘れなくてはならぬ。

神聖の境涯に達して初めて神理を学習し得る資格が生まれる、こゝまでみづから到達し能はぬ人に神理を説くことは困難である。大に聖き物をさふる勿れ、豚に眞珠を投ずふる勿れ

とキリストが言つたのは比喩ではなくして、動物靈の憑依者を目指して言つた言葉である。またその時代の常識に終始し抽象的存善惡と物質的功利害の問を右往左往する人間界に在する境涯の人にもプラグマチズム以外に真理の实体は捕握し難い。まことに自己の淨化なくしては神(眞)界へは入ること能はずるのである。

然し斯うして一方に自己淨化を努めても、神界の神理の内容はそれだけで獲得し難い。部分的断片的な真理は直接その人の体験によつて得られやうが、神理の全局は学習によつて得られ、益なし、學ぶに如かず

孔子が言ふのは此の事である。清淨身への鮮明を得ても真理の学習がなければ道の實存に充實した神代の神人の境涯には到達し得ない。

斯の如くして祖先の靈統を擔いで神は無く神理の学習を度外視しては正しい祖先の神人の境涯に廻り合ふことは出来ないのである。脱俗の心身は淨化された真理の容器物である。この境涯に至る方法を神道では「核心」といふ。この核心によつて淨化された心身に生命の真理を注入することを「櫻ざ」といふ。自他のうちに生きてゐる微妙な靈の動き、祖先からの遺産である遺傳的素質を識別する勳を靈覺(靈感)といふ。言靈學で言へばこれは「ア」といふ生命の实体である。昔ねく全宇宙全世界に日夜々行はれて諒ることなき生命の原理法則を見究はめる勳を神覺(理性)といふ。言靈であらばせば「エ」である。幽齋は前者を目的とし、顯稱は後者を目的とする。

太古の我等の祖先人は現代の我々が行ふやうな勿体無かつた仰々しい形式を以て神の祭祀は行はなかつた。すべて神代のごときは學問の理論にしても社会制度にしても生活様式にしても現代のそれとは超越してゐた時代であつたから、現代を基礎とする類推の方法を以てしては神代の内容の正しい把握は不可能である。神代は言葉即道、生活即道の時代であつたから、文字通り現實に神の時代であつたら、態々神社を造るとか御常々神を立てる

とか言ふやうな故なら形式を以て神を頭とする
かならぬ必要がなかつたのである。神の生命
の原理がそのまま人間の生活の原理であつた
から、すなはち生命なる神は生活そのもの
の中に円融無碍の様態を以て活動してゐたか
ら、形式を以て特に神を示し現はす必要はな
かつたのである。

神武建國の時にその祭典が行はれたことが
伝へられてゐる。もとよりその祭典は現代の
如き祭典ではなかつた。それは紀記の伝にキ
れば「天の八十瓊」を作り「磯城神籬」を建
つとある。爰とは言語の原典として用ひるた
めに神代表音文字を記した粘土盤文字のこと
である。磯城神籬とは五十城（シキ）すなは
ち五十首の組織を以て生命のあらゆる律動の
相さあらはして宇宙萬靈を組織したものであ
り、即ち磯城の完成体が神籬（靈籬）（モロギ）
である。即ち建國のために行はれた
祭典は純粋な学問的行事であつた。建國の祭
典がすなはち建國の憲法の制定発布であつた
現代のやうに天皇の即位式は即位式で儀式と
して別に行ひ、憲法は憲法としてそれとは無
關係に議會で審議すると言つたやうなやり方
とは全然趣きを異にしたものであつたのであ
る。

その頃そこには形式のための形式に終るや
うな特別な儀式祭典はなかつたし、もとより
その間不可解不可思議が残存する如き何等の
神秘も存在しなかつた。在りあるものは自他
に明白な生命の真理だけであつた。生命の原
理を眞鈞り合はせてあらはすための学問と、
それを実行するための政治経済があつただけ

である。
生命原理を眞鈞り合はす方法の経緯は「齋
まし（イツキ）及「嫁ぎ」の道である。イツ
キとは五作きであつて、アイウエオの五行を
以て生命の實在をあらはし、トツギは十次き
であつて、一二三の十進數を以て生命の冥相
を位置して行くことである。イツキを位置師
といひ、トツギを時置師とも言ふ。これが布
斗齋運用の方法である。

このイツキとトツギの道を行はずして直接
に神（神）を念する態度を「おろがむ」とい
ふ。それは愚か者が神に対する態度のことだ
である。理性人たる神人（山人）の態度ではな
いのである。この「おろがむ」の態度を徹底
させたものが実は愚禿禿の念伴である。聖
徳太子、弘法大師、菅原道安のことはさて置
いて、體驗からは入つた人としては親鸞の道
が一番惟神の道に近いと言へる。はつきりと
言ひ切つてしまふならば神（真理）を「おろ
がむ」したとて御利益は純無である。薩摩が武
帝に答へた如く「無功德」である。彌陀佛は
もとより法身であり理体のものである、この
彌陀佛を徹底的に「おろがむ」た親鸞自身は
最後に見出し得た安住の境涯は「とても地獄
は一定すみぞかし」と言ふところにあつた。
まさにこれ無切徳の實状である。然しまた一
面からは此の無切徳が彌陀四十八願の成就に
對する至心信樂の出発点であるわけ、一定
の地獄に安住する淨信こそ彌陀佛の理法の中
にやがておのづから攝取される入口である。
「来末「おろがむ」とか「念する」とか言ふ
態度は神（真理）に對する態度ではない。曰

月風雨の運行の如く公平無私の神（理）に對
して人間の感情を驗り立てて、おがんだとて
念じたこと、御手がどう特別に動いて呉れる
わけのものではない。此の感性的態度を以て
して役に立つ御手は神ではなくして靈である。
靈ならばおがみ或は念すれば感應同交するこ
とが出来ぬ。動物靈でも人靈でもその靈液と
同調することが出来る。また座にこちらを思
念さして御手を操縱することも出来る。おが
然し此の方法を以てして實在でありその現れ
が真理であるところの神（神）と感應同交す
ることは不可能である。神と即ち真理と感
同交する道はこれとは別な人間のいましむつ
の靈性すなはち理性を以てしなればならぬ
ものであつて、感性的な靈感ならば動物もこ
れを持つてゐる。理性こそ、すなはち生命の
至上命令をみづから自覺する靈性こそ人間が
神の子であり萬物の靈長たる所以である。親
鸞が神（真理）を念じて苦しむ技いた錯誤の
原因は斯うした所にあつたわけである。

然しこれはこれとしてすべての太古の祭典
は純学問的のものであつた。斯うした祭り即
ち學問といふ形で教伝され宣布された言の葉の
誠の道といふ生命原理が直ちにその時代に於
ける政治経済の指導原理であつた。すなはち
太古は祭政一致の時代であつたのである。祭
政一致のために神を祭らなければならぬ。
そのために神祭（頭齋）と靈祭（幽齋）とを
混同してはならない。神祭は嚴肅な精進を學
びである。この惟神の學問を頼ることなくして
恩情を以て如何に靈を祀つて御身をやつした
として、真理が景現しない、すなはち祭政一致

は聖み律ない。祭政一致人類の生命原理を如實に實現する政治経済を行ふのでなければ世界平和は望み得ない。

X

「すべての祭典儀式は猿芝居である」と言はれる。甚だ皮肉な言葉だがこの言は正しい。この祭典といふ猿芝居が始まったのは神社神道が起つてからのことである。神社神道以前には國俗神道のみがあつた。國俗神道は言の葉の誠の道であり、純粋の學問である。國俗神道は猿芝居ではない、神様でもない。

日本に神社神道が始まったのは崇神天皇の回祿并殿祿止以後のことである。言ふまでもなく天照大御神の神鏡は言詔の原典であり龜鑑である。朝廷に於て此の原典の使用を廢止したことは言の葉の誠の道による祭政一致の本古政治、生命政治を廢止したことであり、爾後今日に至るまで皇室は此の道の政治経済への運用を極めて居られる。然らば何故に此の時に生命原理則る神祭政治を廢止されたか、その理由に就ては今までも時々述べた所であるが、その頭着原原因の一つとして此の篇に關聯する事柄を挙げてみることにする。それは崇神朝の前後を期して大陸から、學としての神祭の道とは似も似つかぬ靈祭の道が日本に輸入されたからであると言ふことが考へられる。靈祭の道とは佛教と儒教(道教)である。佛儒二教またもとより生命の道を説き、必しも靈祭のみに終始するものではないのであるが、殊に佛教と道教とは因縁を説き、鬼神を祀つて、靈祭をその出發点とし修業の過

程として成立するものである。前述の如く靈祭の法は人間の潜在意識を抽出して種々の奇術魔術を行ひ得るものであるから奇を好む一般民衆は、あたかも今度の大戰後の日本に民間宗教が湧興した例の如く、先を争つて此の二教に投じたわけであつた。このために純理であるところの神明國日本の惟神道の神の理念と、自己の遺徳性であり潛在意識を對象とするところの靈(鬼神)の因縁とが混同し混乱して遂に拾收がつかぬ状態に陥つた。此の間には國內的には更に歸化人の問題があり、國際的には各國に於ける宗教の向題があり、まを將來興隆すべき科学の前途に対する計劃も取り極めて複雑な原因があつたのであるが、これ等を綜合して此の思想の混乱状態を整理するために、崇神天皇は一應生命原理の神鏡、あるハ冠鏡の使用を停止されて民衆の趨かんとする所に從はれたのであつた。

上古は三國皆神人たり、正道にして是ち。中古は曲る、仁義の功に非れば治むるに由無し。末世は愈く邪なり、因果を知らざれば制するに據無し。聖徳太子は此の消息を悉知して斯く述べて居られる。日本人に靈祭の必要が発生したのは此の崇神天皇の御宇以後のことであると言ふことが出来る。斯くして神祭と靈祭の混同は此の時に端を發し、長く二千年後の今日に及んで、神祭と稱するもたゞ靈祭のみが行はれて、神祭本来の意義を辨へる者は跡を絶つた状態になつてゐる。これが回祿并殿祿止、和光同慶政策


施行後の長い間の神祕國日本の状態である。崇神朝以後純理の神祭に代つて朝廷並びに民間に於て形式的な儀式として行はれたのが神社神道である。神社神道は學としての言の葉の道と、言葉と數自体を以てせずして、隱語や呪文や呪物や呪事を以て教示する默示の道である。

禪に不出文字といふことがある。キリスト教に默示録がある、神社神道は同じく此の默示の一種である。默示には呪文、呪物、呪事の三態がある。何れも神理である所の言詔と默示の内容を間接に、言はれぬ象徴的に示す方法である。默示録も古事記も典型的な呪文である。呪物は物体の形態や生物の生態やその名前を借りて来て以て真理を示すことである。呪事は人間の動作を以てそれを示す。

X

先づ呪文の例から説いて行かう。古事記に天之御中主神といふ言葉がある。これは漢字を以て祖立てた一つの概念である。その意義は宇宙の真中の主宰者といふほどのことであつて、これだけの概念を掲げ、これに相當する身体である言葉の道の眞言を探り当てよといふ謎であつて、その謎を解いた眞体は「ウ」といふ母音である。以下古事記の神名は此の種の謎であるところの呪文である。故に天之御中主といふ文字乃至概念に究極の意義があるのではない。その奥にいまひとつの秘められた眞体である「名」があるのである。此の名が眞言(眞名、マナ)である。その眞名が古事記序文に指示されてある「本緯(モ

トツコトバ)すなはち「舊辭(マルコトバ)」の實體である。老子は「名の名とすべきは常の名にあらざ」と説いたが、名の名とすべきは常の名にあらざる本当の名がすなはち此の眞名である。斯の如き眞名を示すための指目の指の役をなす謎の文字や概念がすなはち咒文である。また例へば「大宜都比賣神」といふ概念がある。これを釈けば大いなる・宜しきミヤコ(靈塚古)といふことになる。比賣は女すなはち文字である。これに対して比古靈子)はずなはち言語である。そこで大宜都比賣とは神代表音文字を以て表はされた完全な(宜しき)音(却)といふ意味になる。即ち大宜都比賣とは天照大御神の神格を言霊を以て補綴し發音文字を以て表現した八咫鏡の五十音図であることが判る。

また「伊弉那岐神」といふ命題がある、この文字を分解すれば伊からは縦といふ意味が聯想される、邪はヨコシマで横である、邪はコトゴトクである。そこで縦横のごとくを四示すれば十×米業といふ形が造られる。またイザといふ音には十六といふ意味がある。更に岐といふ文字は山を夫へると書くから、結局伊弉那岐といふ文字から十六數を以て生命の律動の八相(八間、山、)を夫へるといふ意義が新きあらはされ、斯くして、生命律動の根源である生命意志の把持者、實現者の眞言を求めると、五行の「地」に當る「イ」言霊が得られることとなる。即ち伊弉那岐神とはイといふ觀音を示す咒文であるわけである。斯の如くにして古事記の神名は悉く生命原理である言語の實體を指示す

る咒文である、それは言はば真理の謎名のやうなものであるから、咒文を咒文と受けかすにもつたい振つて擔ぎ廻はることは実は実止の業であつて、これ等の神名に相當する人物が昔に居たわけでもなければ、さうした超自然的な靈物が現在どこらま右往左往してゐるわけのものでもない。

伊弉那岐美二神は勿論我が皇祖であるが、二神が皇祖の神人であられるといふことは右の生命原理が成り立つた上での事柄である。二神が尊崇される所以は天皇の祖先であるから無條件に尊いわけではない。その第一義はこの名が原理の名であるから尊嚴であるわけである。同様に日本の神名はすべて生命の原理の部分々々、若しくは綜合体の上に名づけられた名(概念)であること銘記しなければならぬ。しかも斯の如きが我が皇祖であられるのであつて、日本の國體、皇室の意義は、それが明白な生命原理から發祥し、その原理を天壤無窮、萬世一系に継承保全しつゝある所に犯すことの出来ない尊嚴さがある。日本の國體は正史が古いから、或はその内容が不可知不可解で神秘に屬するから尊いと云ふに反らば、それは愚人の妄言である。

古事記其他の日本古典の神名として咒示してある名を輕々しく人名とのみ思ひ錯つてはいけない。これを人靈乃至他の靈物(鬼神)の名と思ひ誤つて靈藏の方法を以て直接無嫌介にそれに感應しやうとすると、前述したやうに四十八變を内容とする理體の名である阿弥陀佛を念じた觀藏の錯誤を繰返へすこととなる。一旦此の錯誤に陥ると人は其処か

ら容易には抜け難いものである。

若し靈覺の人あつて是等太古の神々と直接交通し得たと稱する者があるとしたら、その交通によつて得たところの言葉(思想・行動)を檢べてみるがよい、その言葉が生命の言の葉の道の如何なる部分に相當するか、或は否かによつて直ちに眞神であるか如何うかを識別することが出来る。これが審神(沙庭・サニマ)の原理である、沙庭は朝廷とも書かれる。それはアヤと言ふ音の配列順序になつてゐる五十音の原典に照合して、抑なり豊なり乃至思想なり政治經濟の政策なりの善惡正邪を審判することである。審神をまた「琴彈き」とも言ふ。琴彈きといふのは咒事の表現であつて、その實際は言引きのことである。即ち五十音の言葉の原理、換言すれば眞名といふ知性の発現の原理に當換めて批判することであつて、此の爲事は不古は天皇履命(思金命)上古は棟梁の臣(武内宿禰)、中古は太政大臣の役目であつた。太政とは木占(市斗麻迹)の政の義である。

×

次に咒文と同様に存する咒物の例を示さう。神社神道に於て神を祭るために用ひられるすべての施設、すなはち神宮、神社の構造、祭壇の構成、祭壇の上の種々の神饌、祭官が使用する器物のすべてが此の咒物である。村宮で言ふならば伊勢神宮の唯一神田造りといふ建築様式が抑も最大の典型的な咒物である。神宮の階段の敷、柱の敷、鯉木、知木の構造等はすべて數理と幾何學を以てあらはした生

命原理の法範である、すなはち此の構造によつて神理の体系を明かにしてあるからこれを神明造りと言ふ。

次に例へば神前に供へる酒を取らう。サケすなはちサカ(性)である、性とは萬有の性質のことである。酒を飲めば人各々その性を發揮するからこれをサカと言ふ。

といふところのその性のことである。命とは天の命、すなはちミコト(御言)、すなはち言語である。天の命とは老子の謂ふ常の名に非ざる眞名である。次に水(ミヅ)は稜威(ミヅ)である、ミヅは三出で、萬有は三角形の幾何学的に構成され發展する。八足台の足の數、四垂、八垂に切る帯の數は四、八、十六、三十二等算を以て變化する生命の律動の數理を表現してゐる。餅は鏡餅であつて、モクは百道(モク)すなはち一より榮して百を以て完了するところの言の葉の道の全体數理を示し、この百數が生命の典範であり龜鑑の數であるから鏡といふ。葉・魚(ナ)は萬有の名の呪物である、サカナと言へば姓名(サカナ)の意味になる。鯛といひ平目といひ、大根(スズナ)といひ茶(スズシロ)といひ、名はそのものの性をあらはしてゐる。毛の龜物(ケノアラモノ)はアイウエオ、毛の和物(クニゴモノ)はワヅウエヲ、龜の積物(ハタヒロモノ)はカサタハの四行、雞の積物(タノサモノ)はヤマウナの四行に當る。

此の様は呪物の例はあながち神社神道に於けるのみでなく、既に宗教を離れて独自に存在する日本人の日常生活の風俗習慣のうちにも

幾多數へあがることが出来る。その代表的なものは先づ正月の行事であらう。太古の日本では一月一日、二月二日、三月三日等々その月の數の日に祭典を行ひ、その祭典の様式がそれぐの日によつて異つて來たことの記録が一、二の古典に残つてゐる。その中で一月三月、五月の行事は現在も民間の行事として昔如く行はれ、その様式は人口に膾炙してゐるから、茲では一月の行事について概説しよう。

先づ家々の門に掛てる門代(カドシロ)の松と竹を取りあげやう。マツといふ語は眞対(マツ)と釈き得て、その義は「完全なる相対性」といふことになる。すなはち松葉の形態がそれである。相対性といふことは陰陽といふことであつて、一元の萬有の實在は常に陰陽両面を具備して顕現し、陰陽両面に發展し生成する。この陰陽を古代語でミヅホ(瑞穂)と言ふ、すなはち水火(ミヅホ)である。この陰陽の顕現發展の結果として稲も瑞穂に總多わけである。萬有は悉くミヅホの國である。すなはち松の門代は瑞穂の國の象徴である。このことを言語の上で説明するならば、始原のウ言靈は先づアとワに分れ、アはオとエに分れ、ワはウとエに分れるといふ順序で永久の幾何学的發展綜合の段階を踏んで行くことが生命の姿相の根本的な軌跡である。

竹は田の毛であつて、天照大神神が作られる御堂田である生命の五十音圖の苗代(名和代)から江盛(生長繁茂)して來る生命の氣(ウ)これがタケ(田氣)の意味であつて、その江盛の氣のあらはれを稱して速速(竹早)須佐

土男命と言ふ。

さて「蓬萊」に問はるや伊勢の初便り」といふ芭蕉の俳句があるが、正日の呪物の多くは蓬萊の構成要素になつてゐる。古に飾つた蓬萊を島石といふが、これは結管式に甲けられる。門口にかける略式のものも掛ける蓬萊といふ。

蓬萊といふのは形而上の日本の國体原理を指して古代支那人が呼んだ名である。蓬萊・瀛洲・方壺・岱輿・員嶠の五山はアイウエオ(木土金水火)の五行を象徴した名である。この島台の上の高砂の尉と蛇は言ひまでもなく岐美二神の姿である。二神は島を生み、神を生く造物主である、すなはち前述の「イ」言靈である。島とは形而上の宇宙の範疇であり、神とは個々の言靈及び言靈の綜合体である。萬有は「イ」すなはち生・命・蒼(イ)のあらはれであり、イの所産でないものはない、故にこれをイの道すなはち生命(イノチ)と言ふ。而して此のイなる生命意志の姿容が十作(燈ぎ)の道によつて數と言葉を以て生命の姿相を創造し運営して行くのであるから岐美二神の原運は結管といふ人生の創造の出發の典型であり、龜鑑であるわけである。

島石の上には鶴と龜とが飾られる。先づ鶴は叙(ツルギ)の象徴である、此の鳥の嘴の形と用法が叙の運用と似てゐるとから呪物とされたわけだ、ツルギとは萬有の性(タチ、太刀)を截断してその個々の性質を明白にし、斯く明白にされた個々の個性の義(ギ)または氣(キ)を運んで、調和ある全一を眞釣りに合はせる生命の運用方法である。すなはち

ち飯(ツルギ)とは遺業(兼)ハツルギ)の義である。

龜に就ては古代支那に河圖・洛書と並んで龜下の伝へがある。動物の龜甲を焼いてその上にあらはれる紋様によつて吉凶を判断する方法であるといふのは後世の附会の説であつて、龜(カメ)は元来變(カメ、ミカ)である。變は前述の爻(平反)と同義であつて、五十音の神代文字を刻んだ粘土盤文字のことである。古代に於ける八咫鏡は此の粘土盤文字であつた。此の粘土盤の音の鏡が國体の洪範であつた。故に變すなはち龜は生命の象理を示す鳥の原典でもあるわけである。龜トとは粘土盤文字を洪範とする判断方法に外ならない。この粘土盤文字は天照大御神の八咫鏡であり、その運用者を天之宇受賣命といふ。お神楽や西の市の熊手に出て来る女性の姿の「おめし」けすなはち此の龜(鏡)、すなはち八咫鏡の粘土盤の名であり、すなはち天之宇受賣命乃至天照大御神の象徴であるわけである。

以上に依つて鶴と龜とは結局車籠龜と八咫鏡の咒示であることが判つたわけである。因みに皇室の御紋章である菊と桐とはまた此の鶴と龜すなはち飯と鏡の象徴である。菊(キク)は聞くである。聞くとは言葉を聞くことと、五十音の五十鈴の宮の生命の原理を聞き出すこととあり、即ち八咫鏡の象徴である。洞(キリ)は斬りである。高百の世を截断することと、即ち草履紐の象徴である。

数珠に関する正月の行事について少し述べたい。正月の祭典の日取りは、

るが、その日取りはすべて言葉の道の構成に於ける節々に一致するやうに定められてある。

一月の祭典は一日、三日、七日、十一日、十五日、二十日に行はれる。一は太一の始原の數で天之御中主神。三は産(サン)に通じ産靈の數、天之御中主神、高御産巢日、神産巢日の所謂造化三神、生命の象証法的發展の出発の數である。音で言へばウ・ア・ワの三音である。七は天之御中主から豊靈野神に至る母音半母音の總數で、音で言へばウ・ア・ワ・オ・ラ・エ・エに當る。十一は十數が完成された次の數で、數といふものは元来十までしかない、あとは反復繰返してある。鏡餅の百道(モク)の原理は十數を以て飯(ツルギ)されて完成されるから、十一日に百道の完成を祝つて鏡開きを行ふ。十五は天之御中主から檀根神までの數で、ここで親音イ・ヤを除いた母音・半母音・父音のすべてが出揃ふ。二十はもとより布斗(ニシ)麻理の數である。これ等のほかに更に七草の行事の意義や、蓬萊の内容に飾られる昆布・橙・裏白・神・栗、ほんだけら・海老などの呪物の意義を説くとよいのだが、ここでは取りあはず是等の所謂神饌の悉くが生命原理の夫々の部分の咒事であることを承知して頂いて置いて、あとは讀者が銘々にその意義を考へて頂くことにしよう。

次に咒事に就て言へば先づ神前で行く拍手である、この拍手は前号でも述べたが、

本音のことである。これぞ「眞學流の肩骨」とも言ふ。マトは佛陀(浮陀)とも通じることが動作によつて二十といふ數を現はすことが拍手といふ咒事の意義である。四拍手すれば四十となる。これは子音の數である。八拍手で八十となる。八十(ヤソ)は耶蘇とも通じらうしい。百から始めると終りの二十數を差引いた残りの數で、「百、八十結び」などといふ様に用ひられる。その他十六、三十二、六十四拍手などが行はれることが文獻に見えてゐるが、いづれにしても拍手は二の乗積數でなければ最初の太(布斗)の意義が免失なはれてしまふ。三拍手などといふ異説を立ててはいけない。

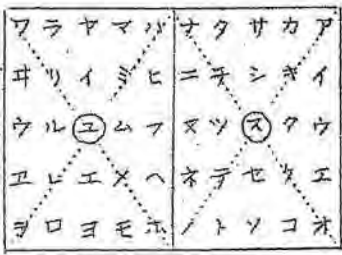
手を用ふる咒事といまひとつ典型的のもの

は密教で用ふる各種の「印」であらう。外經印・内經印・金剛合掌・蓮華合掌など種々あるが、いづれも十指の夫々をアサタナハママラアの十個のリズムに據して、この十律が如何に展開し、如何に結合されるかざあらはず、咒示が此の「印」である。直接言語を用ひず、咒文・咒物・咒事を以て指月の指とするから密(秘密)教といふ。密教を日本へ持つて来て、初めてその默示の意義が判つたためにその名を改めたのが弘法大師の眞言宗である。眞言すなはち眞名(マナ)である。眞言宗は密教であるが既に密教を超越してゐるわけである。弘法大師の幼名を眞諱(マナ)と言つたことが、これは取は後世に改らなかつた。

次は咒事に就て言へば先づ神前で行く拍手である、この拍手は前号でも述べたが、

X

日本神道に於ける思事の本は代創的なるもの
 なるが、すくなく天皇の御即位式大嘗祭に於
 ける各種の御儀である。御即位式は先づ修紀
 主基の齋田の御儀より始まり、まな重、節折
 衣、すめの式等種々の行事がある。ここでは特
 に修紀、主基の田の意義について概説したい
 とする。



主基田
 修紀田

この図は言の葉の誠の道に於て天津金木の五
 十音図といふ。薙劔(カヲサビ)の木刀とも
 いふ。須佐之男の神格とあらはした範疇であ
 る。此の図を中央から二令して向つて右を主
 基田といふ。主基とはヌ(主)を基とするとい
 うことで、主基田の中心は「ス」(巢・鸛・
 鏡)である。⑦カサタナといふ主として陽性
 音から成り立つてゐる。向つて左を修紀田と
 いふ。修紀とは悠々たるいどすちといふ様な
 意味で、その中心は「ユ」である。ハマヤラ
 ⑧といふ主として陰性音から成り立つてゐる。
 主基田の音の配列に当惑する思想は、たとへば
 統制主義、專制主義の思想である。中心に
 「ス」(統治者)が位して、がうちりはしてゐ
 るが、身動きの自由が利かない。この思想の

範疇を具体的に展開する。ソレエト、ロレト
 ヤヤヤの様な形態に存する。修紀田の思想を
 展開するとアメリカ式の自由主義になる。中
 心に「ユ」が位して夢のやうにはつきりしな
 い。ユを中心とする田、すなはちユナ、これ
 がUICDAの語源であるといふ説も成り立ち
 まうである。天皇の御即位式は此の修紀・主
 基の田を作る行事から出発する。

大祓祝詞に「天津金木を本打ち切り、末打
 ち断ぎて、千座の置座に置き足はして」とい
 ふことがある。抑もそのかみ、皇孫命が高天
 原の生命原理を継承して天降られて、その原
 理を實現された大倭日高見の國に、何時の頃
 からか天津罪、國津罪の幾許の罪穢れが発生
 する。その時は天津金木の本末を打ち除いて
 その残りの内容を色々に置き換へてみて工夫
 せよ、それと同時に「天津管管を本リり断ち
 末リり切りて、ハ針に取替きて」而してそれ
 を以て「天津祝詞の本祝詞言を宣れ」といふ
 天皇の御教示が大祓祝詞である。
 五十音図といふものは極めて簡單なもので
 あるが、人類の言語(真名)の全局であり、
 知性活動の全局すなはち思想文化の全體を
 示はしてゐる洪範である。而して天津金木と
 いふ右の範疇は須佐之男命が持ち荒した世界
 の縮図である。記紀にも大祓にも記されてあ
 る様に須佐之男命は天照大御神の御宮田すな
 はち「天津本祝詞五十音圖」の洪範を、睡放
 ち、整理め、植放ち、頻時、臣刺して散々
 に破壊してしまつた結果、天照大御神の岩戸
 隠れを巧業して、世の中を常闇にしてしまつ
 た悪しき業の神(思想体系)である。然らば

何時の頃か須佐之男命が世を打ち荒し始め
 たかと云ふと、神代のことばを置いて、そ
 れは明かに天神天皇の神鏡の同床共殿禁止の
 時からであつて、その時以來天照大御神の思
 想体系をそのまま實現する政治が停止された
 ことを「二度目の天の岩戸隠れ」と説く宗教
 もある。その後世界は須佐之男命の神格通り
 の状況に漸次なつて来ながら今日に至つた。
 天津金木の音の配列は現在の世界の思想界の
 縮図である。天皇の御即位の儀式は修紀田・
 主基田を作られるところから出発する。すな
 はち天津金木を以て世界の思想の現状を音の
 上の範疇に現はすところから出発する。

天津金木の五十音図の本と末に當るア行と
 ワ行を除いた奥中のカサタナハマヤラの八行
 は、天津管管の八行(ハ針)と置き方の順序
 は異なるが同一内容を有する。そのカサタナハ
 マヤラのリズムは、これでは文明の完全な運
 管が出来ないから、このリズムを置き換へて
 調和のとれた順序に直すことが、千座(直座)
 の置座(置戸・置所)を置き足はすことであ
 る。この様にして先づ天津金木の修紀主基の
 田の範疇を作り、それを作り要へて、人類生
 命に即した合理的な理想の順序に組立てて行
 く操作、方法が天皇の御即位の儀式に示され
 る種々の記事の次第である。御即位式と大祓
 のとは一方は記事であり、一方は咒文である
 が兩者その始めと終りに一貫したものがあつ
 る。御即位式は「あさめ」の御儀を以て終了する。
 大祓は五十音を⑩タカマハラナヤサ⑪の順序
 に置き足はすところの「天津祝詞の本祝詞言
 の完成を以て終了する。天津本祝詞の五十音

四は「ア」から「サ」までの配列であつて、これを朝庭(アサニワ)太麻(フトアサ)と言ひ「あせめ」とも言ふ。

日本天皇の重大な任務の一つは此の御即位の大嘗祭と及び宮中に於ける年中行事の各種の御儀を古式を崩すことなく繰返し、奉行せられて、その伝統を完全に継承保続されることであると言つて差支へないと思ふ。これ等の御儀は天皇が國家統合の象徴であるといふやうな漠然とした抽象的な事柄以上に遙に重大な意義を有し、更には萬憲法に定められた天皇が日本國家の元首であるといふ意義をへも超越した天皇の宇宙的すなはち生命的意義を示すものである。

天皇が儀式を行ふのは神を祭るためである。神を祭るといふことは眼に見えぬ不可知不可解な神祕の超自然的存在者に畏敬の念を表すといふ様な深理性的行事を意味するものではない。それは嘗て太古に於て皇祖の聖皇が言葉と歌に於て冥明地掘し給ひた生命の原理原律を、史文・呪物・呪事の形式を以て、言はる藝術的に、象徴的に表現することが形式的に神を祭る儀式の意義である。換言すれば天皇は執り行はせらるる各種の儀式によつて生命のロゴス(言葉)の意義を昔ゆく人々に默示し、そのロゴスが斯の如く正系に保続継承されることと中外に宣揚し給ふことがその意義である。この儀式はもとより天皇個人の意志から出たものではなく、皇祖聖宗から萬世一系に天皇が継承せられてある責任であり、且つその默示の内容は人類の生命内容の一定不変である限り不変であるところの真

理であるから天壤無窮のものであるのである。同床共殿終止以後の時期に於て、天皇はその知食したまふ生命原理を言葉を以て顯はし示し給はぬこととなつてゐるが、その代りとしてその間せよ此の様に呪物・呪事を以て継承し、默示しつゝあられるのである。

X

斯くて神を祭るといふことは、本来の言葉と歌の原理を以てするにせよ、乃至史文・呪物・呪事を以てするにせよ、神(真理)を示しあらはすことである。現在の祭典で神前に種々の物を供へ行事を行ふことは、それによつて神といふ超人間的、超自然的な存在に向つて敬意を表する意味に考へられてゐるが、神社神道祭典の本来の意義はそのやうな如稚な業ではなくて、それ等の呪物・呪事によつてロゴスである神の象徴を冥処に默示することを目的とする藝術的な営みである。繰返して言ふが神は決して不可知不可解なものではない。

蓋し人の靈たるや、知る有らざる莫し、而して天下の物、理有らざる莫し、惟だ理に於て末を窮らざる有り、故に其の盡さざる有るを知るなり(大學)

と支那人も言つてゐる。ロゴスである生命の原理の神は太古既に明かにされ、言語と歌によつて把握表現されてゐた。支那人もこれ先王の道、結繩の制と稱してゐた。爾來ある時期以後は、道は史文・呪物・呪事の中に對じ込まれて、その形態に於て今日まで保存されて來てゐるのである。若し生命のロゴスで

ある神の存在と意義を認め難い者が居るなら、須らく科学の真理を真理とするがよい。その科学の真理を自己に返照して、その真理が同時に自己の行動を規範する良心の至上命令なりと自覚する時、その命令者及命令の内容がロゴスであり神であるのである。神には此の道がらも到達し得る。

ロゴスである神は普遍的存在であるから、何も祭壇の奥にだけ鎮座ましますわけはない。その神に向つて餅や酒や野菜や魚を聞ひせ、お食へなさいと勧めることは常識から考へると実は噴飯に値する話であるわけである。宇宙のロゴスが人間や動物の様に餅や魚を口を開いて食ふわけはない、またロゴスは裝闍婆(ケンダツパ)でもないから匂ひも嗅ぎはしない。斯の如き営みを称して愚人の猿芝居といふ。

即ち呪物ば人間から神に捧げるものではなくて、神(ロゴス)から冥の場に於ける祭官及び参列者に示されることと神自体の姿である。それが默示を以てする神社神道および世界のすべての宗教に於ける神祭本来の意義があつて、ロゴスの様相を再現するための一種の藝術であり芝居であるわけである。然るに此の純ロゴスのな藝術の意義が、日本に於ては同床共殿終止の時期を降ると共に、漸次感情(感性・靈覺)を以て祖先靈や鬼神を祀るところの靈祭の意義と混同されて、本末のロゴスの意義を見失はれてしまつた。ロゴスたる神を見失つた神祭を根芝居といふ。

以上の如く神祭と靈祭との間には截然たる区別がある。神祭は神を祀る行為であり、靈祭は神を祀る行為ではない。

派神道に於て祖老を祭る場合も、神を祭る場合と同様の呪物・咒事を用品に用ゐる、これは祖老即神、神即祖老である本来の究極的意味から見れば当然なことであると言ふことも出来る。

X

五串立て御酒(ミヅカ)おへまつる神主のうづの玉かけ見ればとほし

これは祭壇を行つてゐる神官の心境を眺めて取喻した古歌である。威儀を整へ、咒文呪詞を唱へ、呪物を並べて形式を整へ、その要因受を醸成したぐけで、それだけで神即口ゴスである生命の原理がそこへ実現するわけのものではない。その時更に魂を鎮め、心を整へてその名を呼べば鬼神は其処に降臨して聖祭は成立する。然し鬼神の祭は神の祭りでない。神を祭るために形式を要するわけは整へて、それを以て神を祭り得たと見做すものは禁止千鳥の猿芝居である。すべての神祭は猿芝居であつてはならない。猿芝居でないためには、みづからのために先づみづから行ひつゝある咒文・呪物・咒事を叙かなければならぬ。黙示を叙かず、黙示を叙くために行ふにあらざる神祭は猿芝居であつて、人間が行ふ藝術とはならない。同様に聖堂を以て行ふにあらざる聖祭はあるひは虚假感しか自己満足だけにしかならぬ徒爾であるといへやう。現代の神祭は言はずすべし古来伝承された口ゴスに関する原雅な藝術であり芝居である。舞臺の俳優ならばもとより演劇する戯曲が何であるかを承知して芝居をする。然し動

初は猿は其の筋書きを知らず、たゞ形古きを鼻似する。

故に言葉の道を学んで行く者は必ずしも従来の神社神道・宗派神道が行つて来た祭事の形式を行はない、それが芝居であることと承知してゐるからである。また純理の学問の中には鬼神が介入する余地はないから、言葉自体に取つては靈祭の必要はない。たゞ自他のみたまの淨化修養のために幽齋を行ふだけである。

言葉の道を学んで行くと黙示を以てする祭の意義がはつきりして来る。この呪物・咒事本来の意義を洗ひ出すことが言葉学研究の現段階であるとも言へる。この呪物・咒事による象徴以前に言葉の道があり、その道の意義内容が太古神代の正しい内容である。

木初に言葉あり、言葉は神と借にあり、言葉は神なりき(ヨハネ伝)

全地は一つの言葉、一つの音のみなりき(創世記)

ここへ還つて行く道が言葉の道(言葉学・皇学)である。故に言葉学にあつては宗派や学派を立てる必要がない、すべての宗教の宗派の神立が揚棄されて唯一つの生命の言葉の道に帰一されて行くからである。言葉の意義が世の中に理解されて来れば、やがて世界から宗教的な祭壇の形式と行事がなくなつて来る。その必要がなくなるからである。

天皇が行はせられる即位式の祭典の行事も前述の如く明かに國体神道の祀事である。祀事は藝術であり芝居である。この祀事を天皇は天皇御自身のために行はれるのではない。

一つは、祀事の形式を通じて人衆に生命の原理の内容を自覚させる爲にである。一つはその原理を形式によつて保存継承するたれにである。斯の如き祀事を御一代毎に必ず行はれることが同族共感発止以後の神祕國日本の天皇の御行事になつてゐる。歴代天皇は約二千年に亘つて、天皇御自身が知食す生命原理の意義を祀示して来られた。日本國民は二千年も觀てゐればもうその意義に氣付かなければならぬ。

神代の祭政一致の生命原理の内容を遂に復原し、自覚し、闡明し、以て我輩日本人が今日までその保管の任に當つて来たところの人類の遺産として、それを以て世界文明の最高の指導原理として、普ねく人類に呈示することこそ日本人の最高の爲事であり天職である。そのためには、佛教なら佛教でよい、キリスト教ならキリスト教でよい、これ等絶對の法によつて一應はまづ自己のみたまの内容と因縁を究明しななければならぬ。すべて幽齋(靈祭)の法は實は薄行人やりとしてゐる、はつきりとは判り難い夜鬼の國(黄泉國)の修法ではあるが、自己及省を以て一通り此処を通つて来ないと、清淨無垢な神代の我々の祖先の神人の境涯に還元することは難い。因縁を識別し業を反省する佛教、鬼神を審判する道教、罪の懺悔を行ふキリスト教、みたまの因縁を闡明する宗派神道が日本に必要な経緯はこの爲である。(以上重要且つ微妙な経緯をから書き足らぬ兵が多々あることと思ふ、不

充分な氣は面談によつて啓蒙し合ひたいと思ふ)